

方言の比喩語について

愛宕 八郎康隆

はじめに。

『方言資料叢刊』第3巻で、国内諸地の、方言の比喩語を取り上げることになった。全国規模での、方言比喩語の報告資料は、管見ではその例を見ないものである。

この報告資料は、いろいろの角度、視点からの利用、活用が可能かと考えるが、筆者は、方言に生きる民衆の、比喩造語の発想法に興味を覚える。私どもは、方言の比喩語を覗き窓にして、日本民衆の事物に処しての、感じかた、思いかた、考えかた——つまり発想法を具体的に知ることができるとともに、多様多彩な比喩語を通して、日本語の造語法の可能性を見はるかすことができよう。

以下には、方言の比喩（比喩語、比喩文を含む、以下同じ）について、いくらかのことを述べてみたい。

[1] 根強い比喩志向

少々、古い時代のことになるが、『古事記』上巻の冒頭部に、

次国稚如浮脂而、久羅下那州多陀用弊流之時、如葦牙因崩騰之物而成神名、宇摩志阿斯訶備比古遲神（次に国稚く浮きし脂の如くして久羅下那州多陀用弊流時、葦牙の如く崩え騰る物に因りて成れる神の名は、宇摩志阿斯訶備比古遲の神）（『古事記大成』 本文篇 6 p. 43～p. 44）

のように、比喩表現の連出が見られる。さらに時代に沿って、もろもろの古典を辿っても多くの比喩表現に接することができる。

一方、諸地の方言調査に臨んでも、多くの比喩語、比喩文を耳にする。

こうしてみると、比喩の歴史は古く、今日見るところの豊かな比喩の世界は、長の歳月をくぐって今にある歴史的現実と言えよう。

かつて、筆者は比喩の心理に関して、「現代の心理、時代の心理というようなものではなく、時を超えた人間本有の心理と呼ぶにふさわしい、根強い心理であると見なしたい。」（『方言研究年報』28 p. 23）と記した。

方言世界の比喩を見ていると、そこに民衆の、いかにも旺盛な比喩エネルギーとでも呼ぶべきものを感得させられる。

[2] 方言比喩語の造語法

方言比喩語の造語はその造りから見て、A 創出法、B 転成法、C 複合法とに大別さ

れる。

A 創出法は、さらに、(1) 擬声発想のもの(2) 擬態発想のものに分けられる(今は、創出法のものも、広義の比喩語に扱う)。

(1) 擬声発想のものとは、「ピーピー」(あひる)〈長崎市式見町〉、「ポットル」(水車)〈長崎県小浜町〉などであり、(2) 擬態発想のものとは、「チュルチュル」(おばいけ)〈長崎市〉、「ロッパー」(かわはぎ、釣り上げられた後の呼吸の様)〈長崎県対馬〉などである。A 創出法のもは、大人の子供向け造語であったり、子供自身の造語であったりもしよう。

B 転成法は、なかを、(1) 動詞連用形からのもの、「ヤシニャー」(肥料)〈平戸市〉、「ナオレ」(治り→出産)〈石川県白峰村〉、(2) 数詞からのもの、「ハッチャン」(甘藷、8里半で9里【栗】より味がやや落ちるといふ洒落)〈長崎県北高来郡〉、「ヒッチャクハツカ」(720日→1年で、人の2年分近くの仕事をする働き者)〈石川県珠洲市〉(3) 意義転成と見られるもの、「ハンドガメ」(水がめ→家にこもって外出しない人)〈長崎県千々町〉、「メンボー」(目疣→かわはぎ、かわはぎの潤んだ目もとが、目疣【麥粒腫、ものもらい】を病む人の目もとに似ていることから)〈長崎県野母崎町〉などに整理することができる。

次に、C 複合法が注目される。既存の素材語を、さまざまに組み合わせる造語法で、比喩語世界ではもっとも活躍を見せる造りである。その中で、主要なものとして以下の造りに注目したい。

(1) 「名詞+名詞」

「カヤメ」(萱目→萱で切ったような細かい目)〈諫早市〉、「ネコドル」(猫鳥→ふくろう)〈長崎県小浜町〉、「ナシイモ」(梨いも→馬鈴薯、皮の斑点模様が似ている)〈珠洲市〉、「センベーツバ」(煎餅唇→よく喋る人)〈長崎県三和町〉

(2) 「名詞+の+名詞」

「キツネノローソク」(狐の蠟燭→つくし)〈広島県佐伯郡小栗林〉、「ヘビノオバサマ」(蛇のおばさま→とかげ)〈珠洲市〉、「ホトケノウマ」(仏の馬→かまきり)〈長崎県壱岐郡芦辺町〉

(3) 「名詞+動詞連用形」

「ウミテラシ」(海照らし→なたおれの木、月あかりに、この木々の白い花が、波静かな鰐浦湾の海面に照り映えるところから)〈長崎県上県郡上対馬町〉、「ホケダシ」(火気出し→息ぬき)〈長崎市柿泊町〉、「ドビンオトシ」(土瓶落とす→尺取り虫)〈広島県白木町〉、以上は、いずれも先行名詞が「を」格にたつものである。

「ヤカントギリ」(薬罐たぎり→熱しやすく冷めやすい人)〈長崎市〉「シリヤケ」(尻焼け→三日坊主)〈長崎県三和町〉などは「が」格にたつものであり、「シリシカレ」(尻敷かれ→妻に対して頭の上がない男)〈長崎市柿泊町〉は「に」格にたつものであるが、

「ノコギリアキナイ」（鋸商い→行きも帰りもする商い、鋸を扱う往復動作を取り込んでいる。）＜珠洲市＞の場合、「ノコギリ」を単純に「を」格のものとすることはできない。このように、的確な「てにをは」を求め難いものも見出される。

（４）「動詞連用形＋名詞」

「オガミムシ」（拝み虫→かまきり）＜広島県旧廿日市町＞、「デベソ」（出臍→出たがり屋）＜長崎県柿泊町＞、「ヌスケアンドン」（煤け行燈→ぼんやり者）＜長崎市矢上町＞、これらは、先の（３）とは造りのうえで逆になっているもので、（３）に比べて振わない。

（５）「動詞連用形＋動詞連用形」

「ホシカリ」（干し狩り→かさご【魚名】干潮時に獲る魚の意）＜対馬全島＞、「タテガレ」（立ち枯れ→老衰死）＜長崎県大瀬戸町＞

（６）「形容詞語幹＋名詞」

「トンオキ」（遠沖→遠方）＜長崎市京泊町＞、「カルコーベ」（軽頭→おっちょこちょい）＜珠洲市＞、「サブイボ」（寒疣→鳥肌）＜長崎県壱岐郡＞

（７）文形式

文形式の比喩語である。

「イシャイラズ」（医者要らず→アロエ）＜熊本県南関町＞、「ケツフカズ」（尻拭かず→戸、障子などをしめない人）＜富山県東砺波郡＞、「トナリシラズ」（隣知らず→ばたもち）＜珠洲市＞、「ニシャドッチ」（西はどちら→蚕の蛹 定本柳田国男集19巻、p. 238. 239による）＜関東地方＞、「オガマニャトーサン」（拝まねば通さない→かまきり）＜平戸市＞、「アブッテカモー」（焙って噛もう→すずめ鯛の干物）＜福岡市＞、「オトトイコイ」（一昨日来い→かなぶん）＜佐世保市＞

以上、上には、方言比喩語の造語法を、その造りの面から、主要なものを見てきた。

なかで、B転成法の（２）、（３）などに接するにつけ、その発想の自在さ、奇抜さに驚かされる。ここには奔放とも言えるバロール化の心理を見て取ることができる。

C複合法にあっては、その主要な造りとして、（１）～（７）を挙げているが、口頭語の世界ゆえ、人々は事物に処して、瞬間頭をよぎる比喩の想をそのままに言語化する時、日本語の自然として、なかでも、（１）「名詞＋名詞」、（２）「名詞＋の＋名詞」や（３）「名詞＋動詞連用形」、（７）文形式に拠りやすかったものと考えられる。文形式のものである、「～ズ」の造りが目をひく。

〔３〕方言の比喩発想

方言の比喩語にせよ、比喩文にせよ、そこに発揮されている発想能力には、まことに逞しいものがある。比喩の発想能力は、換言すれば連想能力であり、想像の能力と言えよう。

それは、

○ スズムシン ジンタン フクマシエタゴタル コエデ ウタワス バイ。(あの人
は) まるで鈴虫に仁丹を含ませたようなさわやかな声で歌われるんですよ。<長崎市
柿泊町>

の比喩の文表現ひとつ取ってみても首肯されよう。

比喩語の「ショーヤノカカ」(庄屋の娼→おはぐろべら《魚名》) <苓岐島芦辺町>も
また秀逸である。

「この命名発想は、この魚のちょっと変わった生態——餌にありつくと、きまって藻な
どの陰に持ち込み、巧みに食べつくす——に発するものと考えられる。この生態にも似て、
庄屋の娼(妻)が、人前では慎み深くふるまっても、家の奥にはいり込んでは、たしなみ
も忘れて、がつがつものを食べるという風情を連想しての命名発想と考えられる。」(『方
言研究年報』28巻 p.30 拙稿による)

方言の比喩はまた、さまざまな味つけが見られる。「ハンジョードロボー」(半鐘泥棒
→背の高い人) <岡山県日生町>や「ターラブルイ」(俵振い→末っ子) <珠洲市>など
には滑稽味の、「マンミツ」(万に三つしか本当のことを言わない。→桁はずれた嘘つき)
<茨城県古河市>や「セセリノキントマ」(ぶよのきん玉→小心者) などには誇張の味つ
けが見られる。また、「ウドンヤノカマ」(うどん屋の釜→釜の中は湯だけから言うだけ
の人) <長崎県対馬美津島町>や「ヤマザクラ」(山桜→山桜は葉《歯》が先に出て花《鼻
》が後に咲くところから、出歯の人) <長崎県大浦町>、「コンピラサン」(金比羅さん
→金比羅さんの縁日が10日であるところから「遠か」にかけて、耳の遠い人) <長崎県
川棚町>などには判じもの風情の洒落の味つけが見られる。

このように見てくると、方言の比喩発想はいかにも柔軟自在であり、地方の人々は、比
喩語、比喩文の創作を楽しんできたかのように思われる。その出来栄に、筆者は「言芸」
とでも称すべき芸を感じる。

今ひとつ、ここに方言比喩語の国際的比較のことに触れておきたい。

かつて、親日家の英語科講師(長崎大学)ロナルド・ゴゼウイシュ氏に、長崎の方言事
象「オレボシ」(降り星→流れ星)、「オガミタロー」(拝み太郎→かまきり)を紹介し
た時、氏は自室の書架の英々辞典を開いて、それぞれ、“falling star” “praying mant
is”を教示されたのであった。

方言は、せまい地域でしか通じない閉鎖的な言語であると言われる。そういう状況下、
長崎の方言事象の「オレボシ」、「オガミタロー」が、むしろ国際的であることを知った
のであった。ちなみに、長崎地方の比喩の方言魚名の一つに「クッドコ」(靴底→舌びら
め)がある。これも英語に“sole”(靴底, 舌びらめ)があって発想の一致が見られ
る。

考えてみれば、当然とも言えることで、人間の発想には人種や国境を越えるものがある

う。

方言比喩語の国際的比較は、比喩研究の興味ある一分野と言えよう。

[4] 方言比喩の特色

方言比喩（比喩語、比喩文）の特色の一つは、文学世界の比喩が総じて雅であるのに対して、方言のそれは俗というところにある。俗ということは、民衆の生活色、生活臭に色どられているということである。例えば、改めて、

○ ウヒン ヒヤノゴテ ツクンナ。まるで牛にまとわりつく蠅のように付いてついてくるな。<五島富江町>

○ ズンダレ ナマコンゴト シテー。のびてだれたなまこのようにだらしのない恰好をして。<長崎県小佐々町>

などの比喩文や、「ミンノテマワリ」（箕の手廻り→遠廻り）<長崎県川棚町>、「サラネブリ」（皿ねぶり→奉公人）<珠洲市>、「タニシオトコ」（田螺男→家に閉じこもって人づきあいをしない人）<長崎市小ヶ倉町>などの比喩語によるまでもなく、それは明白であろう。

比喩の種類にしても、文献語では、直喩、隱喩、諷喩、活喩、提喩、引喩、張喩、声喩、字喩、詞喩、類喩など多くを区別するが、方言の比喩は、直喩を主に、隱喩、諷喩などの方言三喩におさまるのも特色の一つとされよう。

ちなみに、諸多のものを人に喩える、いわゆる擬人喩は方言の世界にはむしろ少なく、「オロチ」（大蛇→大酒飲み）「クロッキー」（ごきぶり→色黒の人）、「チョンギース」（きりぎりす→痩せた人）などのように、人の様態を諸生物に擬える場合の多いことが注目される。

おわりに

上には、方言の比喩語（名詞中心に）、必要に応じて比喩文を見てきた。

方言の比喩には、民衆の旺盛なたとえ心とでもいうにふさわしい、のびやかな心理が看取される。

比喩化される分野は多面にわたるが、人の性向分野に比喩語、比喩文が集まりがちなのは注目される。比喩とする批評、批判にはおもしろさをまといながらも、そこに手きびしい道徳意識が感得される。日本の村や集落社会では、法律を定める手だてによるよりは、むしろ、このような造語手段によって道徳律が保持、順守されてきているように思われる。性向分野の比喩事象は、このような役割の一翼を担ってきたものと見られよう。

藤原与一博士は、その著『民間造語の研究』（p. 248）で、「比喩は、民間造語界で

のたいせつな手段である。なにげなくたとえを用いて、ずばりとたいせつなことを言いあらわしている。ここに民衆の生活の知恵のすばらしさ・おそろしさも光っていると見ることができよう。」と述べていられる。

日本語方言における歴史的現実としての比喩表現の状況は、爾後の、比喩の造語、造文の根強い展開を予見せしめるものである。

(あたご はちろうやすたか 活水女子大学文学部)